

踏まれ踏まれても生き返る

NO.15 2024.11.3

編集：発行 木村松夫

090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com

# いたばし雑草通信

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。鮮明画像のPDFでお送りします。

## 終戦の翌年に生まれた78歳、人生初体験の猛暑の夏

## 記録に残しておかなければならない自然破壊の4つの事象

春から続いてきた異常高温は10月に入ってからストップ。曇天の涼しい日が続いていて、こうなると人は勝手なもので、あの暑い夏が懐かしくなってきます。でも、多分これからはもっとひどい異常気象がやってくるのでしょうか。78歳の夏に起こった人生初めての経験は記憶に残しておかなければなりません。

### 異常現象① 春の植物が2回も3回も返り咲き



左の2点は我が家の玄関先の園芸植物。上は、3月、孫の保育園の作品展の際バザーで売っていたレウイシアという肉厚の葉の植物。下は5月の母の日に商店街の花屋さんで買ってきたかなり安物のカーネーションの鉢植え。

いずれも、こういう鉢物は根張りが弱くて、長持ちしないように仕立てられているのが普通で、開花時期が過ぎて夏になると枯れてしまうものです。しかし、今年は真夏になっても枯れずに、3回も開花を繰り返しました。レウイシアは8/27、カーネーションは10/1の撮影です。カーネーションは葉が枯れてからまた新葉が展開してきていて、最終的に2輪開花しました。

気温の高さがこれらの植物が生き続けるエネルギーを生み出しているのでしょう。根はまだ生きていますので、猛暑の後に少し涼しい気温の日がやってくると植物は「また春が来た」と思って、根が活発に地中の養分を吸い上げて半分枯れた茎から新しい葉をのばしてきてまた花を付けたのでしょうか。



### 異常現象② 春の植物の展葉が早い！

赤塚公園サービスセンターロビーの「花だより」展示のために開花植物の下見を続けているのですが、10月中旬にはカラスノエンドウが展葉、ハルジオンはロゼットから本葉に展開。10/31はエコポリスセンターの植物調査で近所の街路を見て回ったのですが、ヤエムグラやホトケノザは今にも花を咲かせそうな勢いで葉を伸ばしていました。植物によって季節を感じるのが難しくなってきました。

## 異常現象③ 花の咲かないスベリヒユ！！??



←これはどう見てもスベリヒユです。本来は直径5mmぐらいの小さな黄色い花を付ける可愛い植物です。まちなかの街路でもよく見られ、写真のように蕾らしいものが出てきているので開花を楽しみにしているのですが、いつまでたっても咲きません。他の場所でのスベリヒユも同じで今年はずいぶん黄色の花を見ることはできませんでした。

木村の推論なのですが、これはポーチュラカとい

う園芸種の二世世代以降の姿なのではないかと思うのです。右の写真は2019年に前野町の民家前で撮ったものですが、その頃は花屋さんの店先に盛んに並んでいました。直径20~30mmの黄、赤、白など色とりどりのきれいな花です。

これ、じつはスベリヒユを遺伝子組み換えしてつくられたF1種なのです。市中に出回り始めた頃はF1種であることが明記されていたのに最近はその表記もなくあまり問題視されていませんが、野菜や花などを遺伝子操作して「優良」な種を生み出す技術はすでに定着しているようです。しかし、生み出された植物は種子を実らせない一代限りの種としてつくられているのです。

上のスベリヒユは我が家のプランターで数年前に買ってきたポーチュラカのなれの果てで、1年草と言われている割には毎年生えてくるのですが、花を付けたことはないのです。WEB百科事典のWikipediaで「スベリヒユ」を検索すると近縁種として「ハナスベリヒユ」が紹介されていて「スベリヒユ属の学名に由来した『ポーチュラカ』の名で親しまれる」との説明。付け足しのようにたった2文字で「不稔」と書いてあります。つまり実りがない植物だということ。遺伝子操作で作られた植物の生命力は強くなっているはず。こんな植物がまちなかのそこら中にはびこってきていて「自然」のあり方が大変貌しつつあります。



## 異常事態④ 行政の「都会の自然」ないがしろ施策が進行中

神宮外苑の再開発に小池都知事が待ったをかけないのはマスコミで話題になりましたが、上野の森にも危機が迫っています。「都会の中の自然保護活動」のパイオニアであり50年の歴史を持つ「しのばず自然観察会」の会報2024年9月号は、台東区が上野公園北部エリアに小型バスを乗入れる実証実験を始めたと伝えています。歴史・文化・自然の資源を守るため車の乗入が禁止されてきたエリアなのに、「来園者の交通利便性」を優先する施策への転換が図られようとしていて、当然ながら同会は警鐘を鳴らしています。

都立赤塚公園でも2028年度まで施行される生物多様性保護保全事業がまだ進行中だということに、最近では「公園利用者の増加」が公園の価値付けの前面に押し出されてきて、そちらが優先。予算も人員もなしに新しい事業が次々に繰り出されて、職員は大忙し。豊かな自然を残した武蔵野台地崖線の保全事業に真剣に取り組もうというのなら、やるべきことはたくさんあるのに、これじゃあ先が思いやられます。